様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３１３０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２０３２

研究課題名（和文）北インド、ボージプリー文化圏の民謡に関するジェンダー分析

研究課題名（英文）Gender Analysis on Bhojipuri Folksongs of North India

研究代表者
八木　祐子（Yagi, Yuko）

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：７０２１２２７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、北インドのボージプリー語文化圏の民謡についてデータ・ベース化をおこない、親族語彙などのキーワード検索を可能にして、ヒンドゥー女性の家族関係、社会関係を実証的に分析することである。具体的にはウッタル・プラデーシュ州の婚姻儀礼の民俗歌謡に関するデータ・ベースを作成し、KH Coderを使って分析した。その結果、婚家に関する親族語彙が多くみられ、花嫁の心情や家族関係など歌い手の女性たちの思いを反映した結果があらわれていること、嘲りの語彙の頻出度が高く、北インド農村の花嫁側と花婿側の社会関係を反映していること、生殖や豊饒に関わる語彙が多くみられることが特徴として明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インド社会が大きく変化するなかで「伝統的な」民謡は口頭伝承であり、資料化されておらず、失われつつあり、読み書きのできない60代以上の高齢女性がうたう歌詞に含まれた意味やメッセージが理解されなくなってきており、集団の共同記憶装置ともいうべき、民謡を記録することは緊急性があり、データ・ベースの第1歩ができたことは大きな意味がある。また、ボージプリー語話者は国内外への移民も多く、データ・ベースができたことで、他の地域の資料も追加可能となる。さらに、KH Coderを使って、分析のモデル・ケースができたことで、通時的な変化や地域的な違いなどの比較分析が可能となり、学術的にも社会的にも意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to create a database of folk songs in the Bhojpuri cultural area of northern India, enable keyword searches such as kinship terms, and empirically analyze the family and social relationships of Hindu women. Specifically, I created a database of folk songs for marriage ceremonies in Uttar Pradesh and analyzed it using KH Coder. As a result, there were many words related to the husband's family, and the results reflected the feelings of the women who performed the songs, such as the bride's feelings and family relationships. It has been clarified that the characteristics of folk songs used in marriage rituals are that they reflect the social relationship between the bride and the groom, and that there are many words related to reproduction and fertility.

研究分野：北インド農村における文化人類学的研究

キーワード：北インド　ボージプリー　民謡　ジェンダー　女性　口頭伝承　儀礼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）ボージプリー語文化圏は、民謡の豊かな地域として知られている。女性は季節や労働の歌、通過儀礼などにさいして、男性に比して数多くの歌をうたう。ヒンドゥー教徒の儀礼には女性しか参加できないものも多く、女性の民謡は口頭伝承であり、資料化されていない。民謡は、調査地域の人々のもつ家族関係や社会関係を把握するための分析には最適なテキストである。高齢女性がうたう民謡の歌詞には、多義的な意味やメッセージが含まれており、それを理解し読み解くことは、ヒンドゥーの社会関係を理解するうえで、極めて重要である。

（２）インド社会は、1991 年の経済自由化以降、大きく変化している。読み書きのできない 60 代以上の高齢女性から若い世代に歌い手が交代するなかで、歌詞に含まれた意味やメッセージ、今では失われた物が理解されなくなってきている。高齢女性が記憶しているうちに、集団の共同記憶装置ともいうべき、民謡を記録することは緊急性があり、ジェンダー研究だけでなく、インドの家族・親族研究においても大きな意味をもつ。

（３）ボージプリー語文化圏の人々は、海外への移民も多く、移住先の民謡や儀礼には、ボージプリー語圏の文化が多くみられることが報告されてきた。これまでボージプリー語に関する言語的研究はあるものの、ボージプリー文化、とくに女性の文化に関する研究は極めて少ない。データ・ベース化をおこなうことで、将来的には、国際比較が可能となる。

２．研究の目的

（１）本研究は、北インドのボージプリー語文化圏の民謡についてデータ・ベース化をおこない、親族呼称やカーストの語彙などについてキーワード検索を可能にすることにより、ヒンドゥー女性の家族関係、社会関係を実証的に分析することを目的とする。報告者が 1980 年代からボージプリー語文化圏で収集してきた民謡や他の研究者の資料をテキストとして読み解くことで、時系列的な変化や女性独自のネットワークを探ることが可能となり、ジェンダー研究だけでなく、家族やカースト研究に新しい知見を提供する。

（２）インドの農村社会が大きく変化し、歌い手の高齢化もすすむなかで、多義的な意味やメッセージが含まれた民謡を記録することは緊急性をもち、重要な意義をもつ。今後、国内外のボージプリー話者の多い地域で資料収集し、比較分析をおこなうために不可欠な研究である。

３．研究の方法

（１）報告者が、調査地域である北インド、ウッタル・プラデーシュ州アザムガル県で、これまでに収集してきたボージプリー地域に関する民謡の資料を、ヒンディー語のデーヴァナーガリー文字及びアルファベットでデータ・ベース化にとりくんだ。とくに、婚姻儀礼については、比較しやすい材料が揃っていると考え、優先的にデータ・ベース化にとりくんだ。

（２）2018 年２月に調査地域において収集した婚姻儀礼に関する民謡を、デーヴァナーガリー文字及びアルファベットで入力し、翻訳した日本語を加えてデータ・ベース化した。

データ・ベースの分析にあたっては、KH　Coder を使用した[樋口　2021]。

４．研究成果

（１）KH Coder を用いて、データ・ベース化した民謡をテキストとして、頻出語順リストを作成した結果、親族関係については、まず、ドラヒン（花嫁）、ドラハ（花婿）という直接的な語彙よりも、現地語で、それぞれバヒニー（女の子）、バンナー（女の子）、バイヤー（兄弟）、バンナー（男の子）などが、頻出語として多くみられ、家族や親戚の心情をうたった民謡が多いことがわかった。また、サスル（舅）、サース（姑）、チャーチャー（父方のオジ）、チャーチィー（父方のオバ）、バスル（夫の兄）、デワル（夫の弟）など、婚家、つまり花婿、夫側の親族語彙の頻出度が高い。これには、民謡が花嫁側の女性によってうたわれたことと深く関わっており、花嫁の女性親族の心情があらわれていると言える。さらに、親族語彙で注目したいのは、父親をあらわす語としてパーパー、母親をあらわす語としてマミィー、という英語を使った親族語彙が多く頻出したことである。1980 年代～90 年の民謡では、バウ（父親）、マーイー（母親）という語彙が使われることが多かった[八木　1990]。他にも、ランプやワン・ツー・スリーなど、英語を使った歌詞が増えており、40 代以下の世代では、とくに、女性の教育レベルが上昇したことが背景にある。

カースト語彙については、様々なカーストがテキストとした民謡に頻出語として登場している。とくに、頻出度の高い床屋カーストであるナウ、司祭であるパンディット、花屋カーストのマーリーは、いずれも婚姻儀礼に欠かせない存在である。ナウとパンディットは、儀礼のさいに最も関わる職能カーストであるだけでなく、儀礼の場にいる男性であるため、女性たちによって、ガーリー（嘲り）の対象として、民謡に頻繁に登場している。

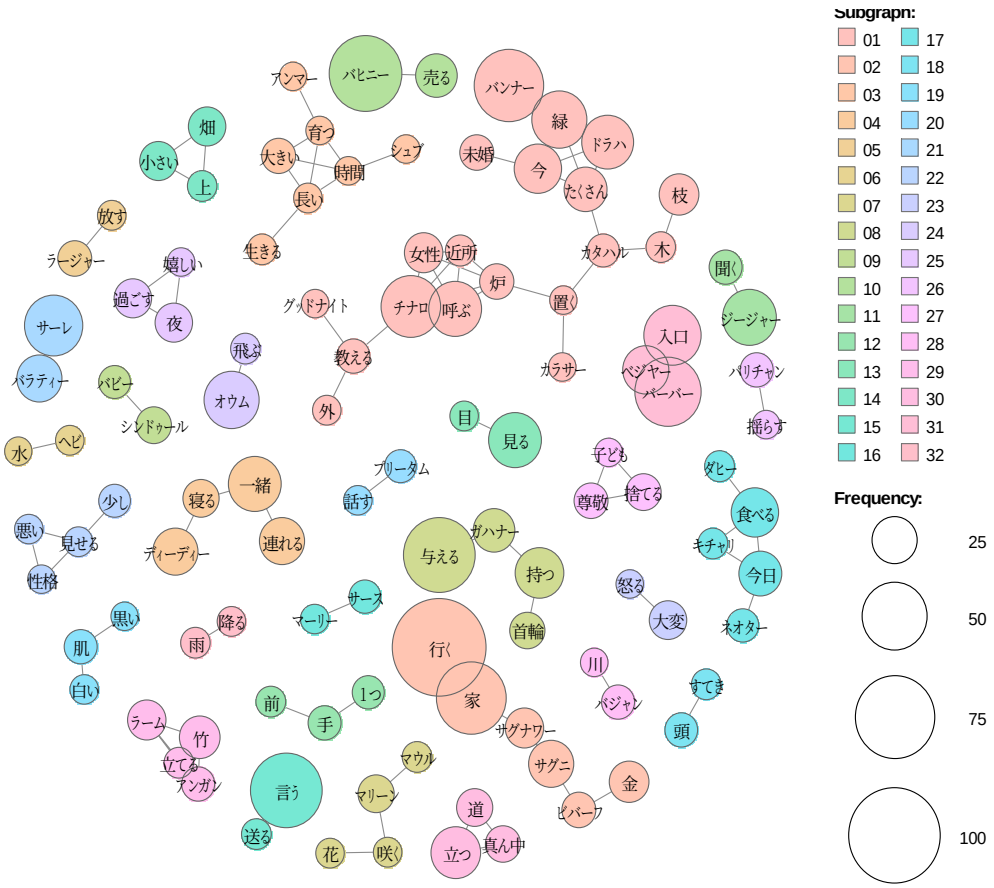
さらに、婚姻儀礼のさいにうたわれる民謡が、他の民謡と異なるのは、嘲りを意味する語彙の使用が多いことである。チナロ、サーレは、典型的な悪口、嘲る語彙である。チナロは、ぶらぶらする、遊んでいる人などの意味で、主に、女性に関連づけて使われることが多い。サーレは、サーラー（妻の兄弟）から派生した言葉で、男性の名前の後につけて、○○・サーレと言うと、非常に侮蔑した言葉となる。これらは、現地でガーリーと呼ばれ、「嘲り」「悪口」を意味する。花嫁側の親族女性や近所の女性によって、ガーリーが最も多くうたわれるのは、司祭が厳粛に呪文をとなえ、花嫁と花婿の婚姻が成立するクライマックスの儀礼の場面である。これは、社会的に劣位である花嫁側がガーリーをうたうことで、優位の側にある花婿側の権威を脅かし、日常的な社会的地位を一時的に逆転していることを示している[Kolenda 1990;八木 1992]。歌詞のなかには、一緒に寝るや男性性器を想起させる杵、竹など、性的な隠喩も多くみられ、豊饒性や多産との関わりがみられる[八木 1992:74;Yagi 2008]。

（２）共起ネットワークをもちいた分析

本テキストを共起ネットワークの形で図示したものが、図１である。いくつか興味深い関

係性がみられる。親族関係でいえば、「バンナー（男の子）」と「ドラハ（花婿）」は１つのグループとなっており、これに「未婚」や「今」という言葉が関係づけられていることから、未婚の男の子が花婿になっていくというストーリーが読み取れる。「バヒニー（姉妹）」と「売る」が１つのグループ、また、「ディーディー（姉）」と「寝る」、「一緒」、「連れる」が１つのグループとなっているのは、姉妹を売る、姉を連れて一緒に寝るというガーリーの歌詞が多くみられることと関わっている。「チナロ」と「近所」、「女性」が１つのグループ、「バラティー（花婿一行）」と「サーレ」が１つのグループになっているのも、ガーリーと関係している。「アンマー（母親）」が、「長い」、「大きい」、「時間」、「育つ」という言葉が１つのグループになっているのは、長い時間かけて大きく育ててきたという母親の心情が読み取れる。他には、「行く」、「家」、「サグナワー（吉なる時間）」、「サグニ（吉なること）」、「ビバーフ（結婚）」が１つのグループとなっており、結婚がおこなわれる家に行き、吉なる時間に、吉なることをおこなうというストーリーが読み取れる。数は少ないが、「肌」、「白い」、「黒い」が１つのグループになっているのも興味深い。白い肌はアーリア系と関係し、身分が高いというイメージがあり、花婿は黒い肌の人より、白い肌の人が好ましいという花嫁の心情がうたわれていることがわかる。

＜図１＞



（3）結論

本報告では、2018 年度に収集した民謡を、KH Coder を用いて、頻出語と共起ネットワークによる分析をおこなった。頻出語には夫側の親族語彙が多くみられたり、歌詞の内容として、婚家に対する女性の家族関係をうたったものや、花嫁の心情、花嫁の家族や親戚の女性たちの心情、また、大家族のなかでの嫁としての不満、夫への愚痴をうたったものが多くみられたりすることなど、歌い手の女性たちの思いを反映した結果があらわれている。

婚姻儀礼の民謡の特徴としてあげられるのは、ガーリーが大きく関わっていることである。とくに、サーレという語彙が頻繁に使用されていることが象徴的である。上昇婚が主流である北インド農村において、劣位の花嫁側が優位の花婿側を、婚姻儀礼の場において嘲るという一時的な地位の逆転がみられることが、本研究でより明らかとなり、興味深い。また、姉妹を売るや、杵や竹、性的な言葉など、生殖や豊饒に関わる語彙が多くみられるのも特徴と言える。今回は、KH Coder を使っての実証的な分析を試みたが、前処理を丁寧にほどこすことで分析に使えることがわかったので、これをモデル・ケースとして比較分析していきたい。なお、本研究の詳しい内容については、「研究成果報告書」にまとめている。

＜参考文献＞

樋口耕一

2021『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指してー（第 2 版）』ナカニシヤ出版

Kolenda,Pauline

1990 “Untouchable Chuhras through their Humour: Equalizing” Marital Kin through Teasing, Pretence, and Farce” ,In O.M.Lynch(ed.) *Divine Passions: The Social Construction of Emotionin India.* Oxford: University of Chicago Press.

八木祐子

1990「シーターの夢—婚姻儀礼の歌にみられる家族関係—」八木祐子編『女性と音楽』（民族音楽叢書第 2 巻）175〜199 頁 東京書籍。

1992「女性・歌・パフォーマンスー北インド農村の婚姻をめぐる一試論」『南アジア研究』第４号、59〜78 頁

2008 ``Women, Abuse Songs and Erotic Dances: Marriage Ceremonies in Northern India"., *In Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan,* Osaka: National Museum Ethnology.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 八木祐子	４．巻 25
２．論文標題 「ボージプリー文化圏の婚姻儀礼と民俗歌謡（その３）」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『 多民族社会における宗教と文化』	６．最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八木祐子	４．巻 24
２．論文標題 「ボージプリー文化圏の婚姻儀礼と民俗歌謡（その２）」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『 多民族社会における宗教と文化』	６．最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八木祐子	４．巻 23
２．論文標題 「ボージプリー文化圏の婚姻儀礼と民俗歌謡（その１）」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『多民族社会における宗教と文化』	６．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八木祐子	４．巻 No.22
２．論文標題 「ジャイトゥア儀礼にみる社会変容―ボージプリー文化圏の事例から」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『多民族社会における宗教と文化』	６．最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八木祐子	４．巻 26
２．論文標題 「ボージプリー文化圏の婚姻儀礼と民俗歌謡（その４）」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『多民族社会における宗教と文化』	６．最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 八木祐子
２．発表標題 「空飛ぶドローン、打ちあがる花火、ーボージプリー語文化圏における婚姻儀礼の変化」
３．学会等名 第３２回南アジア学会全国大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 江口一久編・八木祐子、手塚恵子責任編集	４．発行年 2021年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 398
３．書名 儀礼と口頭伝承	

１．著者名 八木祐子	４．発行年 2021年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 19
３．書名 「北インド社会における女性の儀礼と口頭伝承―婚姻儀礼を中心に」	

１．著者名 インド文化事典編集委員会	４．発行年 2018年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 770
３．書名 インド文化事典	

１．著者名 粟屋利江・井上貴子共編	４．発行年 2018年
２．出版社 東京外国語大学出版会	５．総ページ数 333
３．書名 インド　ジェンダー研究ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関